
4月1日

水無瀬 紗音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4月1日

【Nコード】

N3031M

【作者名】

水無瀬 紗音

【あらすじ】

4月1日。壬晴と虹一の3人でお花見に行くつもりだったのに、外はあいにくの雨。お花見という一大イベントが潰れてしまい暇になった雷鳴は、友人達の携帯に電話を掛けてまわる。今日が何の日か、分からずに

桜が咲き乱れる4月1日。

公園や河川敷がお花見に来ている人達で埋め尽くされる。

はずだった。

折角桜が綺麗だと言つのに、不幸にも今日は雨。雨の中無理矢理お花見をしようと言うもの好きはさすがにいないだろう。

降りしきる雨を眺めながら、雷鳴は一人、部屋の中に居た。

本当なら雷鳴達も今日はお花見だったのだ。王晴や虹一との初めてのお花見。

それをこんな雨で潰された。

「・・・・・・・・」

雨は嫌いだ。体を動かすことを好む雷鳴からすれば、鬱陶しくてしかたない。

(これじゃ修行もできないじゃんか・・・・・・・・)

テレビでは今日がエイプリルフールだから、とバラエティー番組で芸人が嘘を連発してる。だがどれも面白くない。

雷鳴はベッドの上に置いてた携帯を取ると、ある人物に電話をかけた。

数秒してから気だるげな声が応える。

『もしもし・・・・・・・・』

「あ、王晴？あのさー今からそっちに行ってもいい？」

『なんで？』

「暇だから」

返事がない。しばらく我慢していたが限界だ。

「ねえ、聞いている？」

『ごめん。今日用事あるから』

「はあ？」

もともとお花見に行く予定だったのにいきなり用事って・・・・・・・・

何の用事が聞こうとした時、向こうに一方的に切られた。

「なんだよ、まったく……」

王晴が駄目なら次だ、次。

「はい、関ですけど」

電話に出たのは女性だった。

「こんにちは。帳先生いますか？」

「ごめんなさい、帳、今出かけてるの。私も今から出なきゃいけないし……」

「そうですか……。じゃあいいます。ありがとうございます。すす」

帳は教員だし、学校にでも行ってるのだろう。もとからお花見メンバーには用事があるから、と居なかったのだし、おかしくはない。仕方なく次の相手に電話をかける。

「もしもし？」

「虹一、今ひま？そっちに遊びに行ってもいい？」

「え、あ、その、今日は……」

何故か口ごもる虹一。雷鳴はむ、として聞いた。

「虹一も用事あるの？」

「うん、ごめんね……」

そう言うと切られた。

王晴も駄目。帳も駄目。虹一も駄目。仕方ないので最後の一人に電話をかけることにする。

「はい」

「俄雨さん？雷光いる？」

「雷鳴さん……！？え、居ますけど……」

「今からさ、そっちに行ってもいい？今日ひまでさあ」

「すみません！」

行ってる途中で何故か切られた。

しばらく雷鳴は携帯を持ったまま固まっていた。が、やがて状況

が呑み込めてくると、

「なんだよ、それ!!」

「思いつきり携帯を壁に投げつけた。」

幸いにも携帯は壊れなかったみたいだが、衝撃は大きかっただろう。画面が少しおかしくなっていたが、そんなことには目もくれず、雷鳴は部屋を飛び出した。

ちよつと明るいピンクの傘。それを持ってただ歩いた。

川の横を通ると、雨に濡れながらも負けずに美しく咲いている桜が目映った。さすがにシートを開いてまで見てる人はいなかったが、通行人の何割かは桜に足を止めていた。雷鳴もその一人だ。

「急ぐ用事もないのでただぼーっと桜を眺めていると、」

「おや、こんなところで雨の中、お花見かね?」

「いつからそこに居たのか、雷鳴の前にしじまが立っていた。」

「しじま……」

「雨に濡れる桜も美しいものだ。燦々と輝く太陽の下で見る桜も絶品だが、灰色の背景の中に桜色が入り込んでるのもまた絶品だ」

「しじまやはり水は嫌いなようで、白い傘を差していると言つのに更にかつぱを着ていた。」

「だが眼に映る分には不快はないらしく、ただじつと桜を見ていた。雷鳴もそれにならつて桜を見つめる。しばらくすると思ひ出したかのようにしじまが言った。」

「そつえば、君、暇かね?」

「え?」

「雷鳴の返事を待たずに、しじまは歩きだした。それをただ見ていると、」

「一緒に来い。お前を連れてくるように言われているのでな」

「訳が分からずにいると、また勝手に歩き出す。仕方なく雷鳴もその後を追った。」

「とくに会話もなく二人は歩く。行き先も教えてくれない。」

「だが雷鳴はあることに気付き始めていた。」

(この道のりは……………)
「ここだ」

しじまが足を止めたのは、案の定、雷鳴が思い描いていた場所だ。しじまが「入れ」と促す。

仕方なく傘をたたむと、扉に手をかけ、いつものように扉を開いた。

すると

複数の爆発音とともに声が聞こえた。

「誕生日おめでとう！雷鳴！」

雷鳴の目の前に広がっていたのは、クラッカーを持った壬晴達だった。

「壬晴、虹一、帳先生、英さん、雷光に俄雨さんまで……………」
何これなんで……………」

「忘れたのかね？」

雷鳴の後ろからかっぱのフードを下したしじまが進み出てきた。

「今日はお前の誕生日なのだろう？」

「あ……………」

忘れてた。

雷鳴の誕生日は今日、4月1日だ。だがみんなに「今日誕生日なんだよ！」って言ってもエイプリルフルで嘘をついていると思われて信じてもらえなかったのだ。

それ以来、雷鳴は自分から誕生日を教えることはなくなり、家族を失ってから自らも忘れかけていた。

だが……………。

「雷鳴、なんで教えてくれなかったの。雷光さんから聞いたんだよ、今日が誕生日だって」

壬晴が雷鳴に近づいてくる。それと一緒に虹一も傍に寄ってきた。
「雷光、教えたの……………」

雷光が肩をすくめる。

「清水家がなくなつて以来、サラバという人物から『雷鳴の誕生日を祝うのは私と十字だけだ』と言われてね。丁度同じ時に壬晴君達が雷鳴の誕生日を聞いて来て、私も数年ぶりにお前の誕生日を祝いたかつたから、壬晴君達にパーティーを開いてもらつたんだ」

「ちゃんと教えてくれなきゃ、誕生日なんて一生に一度なんだから祝えないよ?」

続けて虹一が照れくさそうに言った。

さらにみんなが口々に言う。

「雷鳴さん、いきなり電話切つてすみませんでした!その、上手く誤魔化せそうになかつたので、つい……」

「誕生日ケーキは帳が買つてきたのよ」

「お花見があつても途中から持つていくつもりだったんだ」

「サラバさんと十字ちゃんからバースデーカード貰つてるよ」

「ほら、主役が楽しんでくれないと、パーティーの意味がなくなるよ?」

言いながら壬晴が雷鳴の腕を引っ張る。机の上には大きなケーキが置かれていた。

雷鳴がそのケーキの大きさに驚いていると、壬晴が言った。

「それじゃ改めて。おめでとう、雷鳴」

顔を上げると、笑顔でこちらを迎えてくれる仲間達の顔があつた。眼の奥が熱くなつた。

だが泣かない。泣かないと決めたのだ。

だから、雷鳴は精一杯の笑顔で答えた。

「ありがとう」

(後書き)

原作では壬晴の誕生日を雪見さん達が祝ってる話はあるんですが、雷鳴と虹一はなかったよな、と思い書き直しました。

だからと言って虹一を書くかどうかと言われたら多分書かないけど！(え)

虹一よりも雷光が書きたいわー！(ごめんね、虹一ノ笑)
壬晴はもちろん、みんなにも幸せが戻ってきてほしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031m/>

4月1日

2010年10月8日14時30分発行